



フランス語の話し言葉における舌打ち音：  
言語学および日仏異文化間コミュニケーションの観  
点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-07-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 美里 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002563">https://doi.org/10.24729/00002563</a>

2018年3月29日提出

## 博士論文 要旨

### フランス語の話し言葉における舌打ち音

—言語学および日仏異文化間コミュニケーションの観点から—

大阪府立大学大学院人間社会学研究科  
言語文化学専攻

学籍番号・氏名 3140501003 森田美里

## 1. 研究の背景と目的

本研究は、これまでほとんど研究されてこなかった、フランス語母語話者の談話に頻繁に現れる「舌打ち音」に焦点を当てたものである。これまで舌打ちが等閑視されてきた背景には、単なる個人の悪癖や雑音としか捉えられてこなかったからと考えられる。日本社会での舌打ちという行為は通常、不満の表明であるため、日本語母語話者の中にはその音を耳にするだけで不快を感じる者もいる。よって、日仏コミュニケーションにおいて、この音が阻害要因になることがある。

本研究の目的は、フランス語談話における舌打ち音に関して、体系的かつ詳細に記述すると同時に、主に言語学的観点から、またそこから発展する形で異文化間コミュニケーションの観点から考察し、その意義を明らかにすることである。

## 2. 本稿の構成

本稿の構成は以下のとおりである。

- 第1章 研究の対象・目的・方法
- 第2章 舌打ち音—先行研究およびフィラーとの関係
- 第3章 研究目的別調査
- 第4章 ESLO コーパスを用いた舌打ち音調査
- 第5章 コーパスにおける舌打ち音の出現と頻度
- 第6章 舌打ち音の用法と機能
- 第7章 フランス語話し言葉における舌打ち音とは？
- 第8章 日本人フランス語学習者と舌打ち音
- 第9章 結論

## 3. 各章の概要

第1章では、以下の4つのリサーチクエスチョンを立てた。

1. フランス語における舌打ち音の生起環境はどのようなものか。

2. フランス語の舌打ち音は個人的な癖なのか，一般的なもののなのか。
3. フランス語の舌打ち音の用法，機能は何なのか。
4. 舌打ち音の認知が人によって異なるのはなぜなのか。

第2章では，日本語，フランス語，その他の言語における舌打ち音研究を概観した。その結果，日本語の「舌打ち」と同等の語がフランス語にはないこと，談話における舌打ち音に関して英語においては若干の研究がなされているが，フランス語では十分な研究がなされていないことを明らかにした。また，さまざまな定義のある日本語およびフランス語のフィラーに関する先行研究も概観し，本研究におけるフィラーの定義を示した。

第3章では，調査Ⅰ～Ⅳの4つの調査を行った。

調査Ⅰのストーリーテリング調査では，フランス人日本語学習者の日本語と母語であるフランス語に舌打ち音がシステマティックに現れることを確認した。また，日本語母語話者の日本語談話では，舌打ち音の生起位置が，フィラーを発する位置と一致するため，個人の単なる悪癖ではなく，フィラーのような役割を持っている可能性を指摘した。

調査Ⅱの地下鉄での行き案内ロールプレイ調査では，話し手の持っている情報量と，舌打ち音を発するかどうかと深く関わっていることを確認した。基本的に無意識に発せられ，聞き手にも聞き流されているが，こちらが指摘すると認知できることが明らかになり，フランス語母語話者からは，「この音は普段から発している」という内省も得られた。また，日仏バイリンガルの調査対象者からは，日本語では舌打ち音を発する代わりに，「えーと」「そうだなあ」「なんだろう」などの言葉を発しているという見解が示された。

調査Ⅲのフランスとベルギーのメディア調査では，舌打ち音がある特定の社会的条件の話者にだけ現れるわけではないこと，フランスだけでなくベルギーのフランス語母語話者の談話にも現れることが明らかになった。また，苛立ちなどの感情とは切り離されていることがわかった。

調査Ⅳの実験音声学的調査では，メディアに現れた舌打ち音と，音声の専門家から収集した吸着音データを比較することで，フランス語の談話に現れ

る舌打ち音の調音点を明らかにすることを試みた。円唇化した両唇吸着音、歯または歯茎を調音点とした吸着音である可能性が示唆された。

調査Ⅰ～Ⅲで得られたデータから抽出した舌打ち音を、その生起環境、聞き手による内省という観点から分析を行い、「情報処理および言語表現処理」、「境界設定」、「発見」、「発話権の取得・保持」という用法、かつ注意喚起機能があるのではないかという仮説を立てた。

第4章では、ESLO コーパスの概要、このコーパスを用いた調査方法、使用意義、具体的な作業手順を示した上で、調査Ⅴ～Ⅶの3つの調査を行った。

ESLO コーパスには1970年代前後のデータであるESLO1と、2008年のデータであるESLO2がある。調査Ⅴの舌打ち音の社会言語学的調査では、ESLO2から無作為に抽出した老若男女、さまざまな社会階層のフランス語母語話者100人の談話を調べ、93人の談話に舌打ち音が現れていることを確認した。そして、舌打ち音が現れない談話の特徴として、調査Ⅱで挙げた話者の知識の有無だけではなく、通常のスピードより遅く話す、あるいは早く話す、あまり相手とのコミュニケーションに気乗りしない、申し訳なさやためらいがないといったことが関わっている可能性を指摘した。

調査Ⅵの舌打ち音の社会的価値と解釈に関する調査では、フランス人大学生、言語学を専門とする者を対象に、舌打ち音の含まれた談話を聞かせ、その音が認知されているのか、舌打ち音の有無によって異なる解釈が生まれるのかどうかを調査した。その結果、前者のほとんどの者が舌打ち音に気づいていないが、舌打ちがある場合には「言いよどみ」「言葉を探している」「いらだっている」という解釈できることがわかった。後者に舌打ち音に気づいていた者はいなかったが、コンテキストから判断すると、話し言葉における句読点である「ポンクチュオン」ではないかという解釈がいずれの者からも得られた。

調査Ⅶの舌打ち音の通時的調査は、調査Ⅳと同様、予備調査的意味合いが強いが、ESLO1 コーパスの1969年に録音された女子大学生の談話データを調査し、5分に1回のペースで舌打ち音が現れていることを確認した。ESLO2よりも40年前のフランス語の話し言葉にも舌打ち音が現れていることがわかり、近年の話し言葉だけの特徴ではないことを示唆した。

第5章では、ESLO2 コーパスを用い、モノログデータとして講演（約3時間）、ダイアログデータとして若者へのインタビュー（約6時間）の舌打ち音の生起環境を比較する調査をした。その結果、モノログ、ダイアログに関係なく、*eah*, *hm* というフィラーや *alors, et, mais, donc* との共起頻度が高く、談話や発話の区切りの部分で現れることが明らかになった。ダイアログでは質問に答える際、または同意を表す際に出現頻度が高いことがわかった。

第6章では、ESLO2 コーパスのデータから抽出した舌打ち音の生起する統語的環境、前後コンテキストを観察し、用法と機能に関して再度考察を行った。その結果、3つの機能があり、それぞれいくつかの用法があることを明らかにした。「話者の情報処理および言語表現処理状況の表出機能」には「語あるいは表現の検索」、「内容検索」、「ためらい」という用法があること、「シンタックスによって調整された談話構成機能」には「境界設定（話題転換、開始、終了、順序）」、「展開（対立、提示表現、説明、訂正、添加、結論）」という用法があること、「働きかけの機能」には「判断」、「質問／答え」、「確認」、「婉曲語法」という用法があることを示した。

第7章では、舌打ち音をフィラーと比較した結果、極めて類似的なものではあるが、舌打ち音は意思的には用いられない点、無声音であると同時に音素とは認められない点、語尾伸ばし並びにイントネーションの付加ができないという点において異なっていることを示した。

また、舌打ち音の特徴について再考察し、前後に境界の句切りとして無音のポーズを伴うことが多く、舌打ち音自身も音声的サインを伴う句切りという音韻的でも語彙的でもない分節の単位ではあるが、可能な解釈がある要素であることも明らかにした。さらに、言語学的な位置づけとして、語彙の周辺にあるものを「ペリレキシック」と命名し、身体的表現と言語表現との中間にあり、フィラーよりもさらに身体的表現寄りの要素、つまり、身体的表現の中で最も発声が大きいのもの、かつ言語的表現の中で最も発声の小さいペリレキシック的要素であると結論づけた。

第8章では、調査Ⅷ～Ⅹの日本人フランス語学習者と舌打ちに関する3つの調査を行った。

調査Ⅶの学習者の渡仏前後の舌打ち認知調査では、フランス語母語話者の発する舌打ち音に気がついている人、全く気づいてない人が存在していることを確認した。前者と後者には動機づけ、学習歴、不安感の有無、フランス語運用能力の差、舌打ち音の認知にそれらが影響を及ぼしている可能性があり、それを検証するために調査Ⅸのフランス短期滞在者と長期滞在者を対象にしたアンケート調査を行った。その結果、フランス語母語話者の舌打ち音が気になり、それによって不安感を抱く傾向にある日本人フランス語学習者は、自己評価が低く、不安感がある、つまり、情意フィルターが高く、また外発的に動機づけられている傾向があることがわかった。

調査Ⅹでは、フランス長期在留邦人の談話における舌打ち音を調査した結果、フランス語や日本語にも、フランス語母語話者と同様に舌打ち音が現れるという事実を確認した。フランス社会への心理的な適応、同化に近い帰属意識、フランスで生きていくという決心と関係があるという可能性に言及した。

本研究での調査結果をふまえて、フランス語教育および日本語教育の現場においては、必要に応じて日本語の舌打ちとは異なるフランス語の舌打ち音の機能、用法などについて、学習者に伝えることが、日仏接触場面において有効であることを示した。

第9章は、それぞれの調査から得られた結果を統合し、記述する形で、冒頭で挙げたりサーチクエスションへの答えをまとめ、本研究の意義、談話における舌打ち音研究の今後の展開について述べた。

(3943 文字)